鶴見文化財学会報
Tsurumi Cultural Properties A.C
vol.20
2019年3月14日発行
鶴見大学文化財学会

二つの出会い

近藤　祐介

私は2018年３月に退職された伊藤正義教授の後任として、この４月から文化財学科に講師として勤務させていただいている。専門は文献史学の日本中世史、もう少し詳しく言えば、15世紀～17世紀の修験道を中心とした中世寺院史ということになろうか。なぜ、このような研究テーマになったのか、そもそもなぜ研究の道を志すようになったのか、今回はそのきっかけとなった大学時代の二人の恩師と、二冊の本について書いてみたいと思う。

1999年に学習院大学文学部史学科に入学したが、受験勉強以上の歴史の知識など全くない私は、学習意欲に燃える多くの同級生たちを見て愕然とし、ダメ学生よろしく勉強よりも「遊び」に専念する日々を送っていた。そんな私に転機が訪れたのは２年生になった時だった。学習院大学の史学科では２年時から専門のゼミがスタートする。そこで私は、家永遵嗣先生の中世史ゼミを選択した。中世史に特別な思い入れがあったわけではなく、古代・中世・近世で悩んだ結果、何となく中世史にしたように思う。

そうして何となく選択した家永ゼミは、とても刺激的な場所であった。家永先生は私の大学入学と同時に学習院大学に赴任されており、ゼミは発足したばかりということもあり、とても自由かつ活力のある雰囲気のもと運営されていた。そうした居心地のよさと家永先生の懇切丁寧な指導のおかげで、徐々に歴史学の面白さにハマり、自身の研究テーマ（中世寺院史・修験道研究）を見つけることもできた。家永先生の指導は熱量にあふれ、研究内容や論文について相談に行くと、２時間くらい話し込むことも珍しくなかったが、その際には、論文の添削はもとより、中世史研究の幅広い視点からさまざまな助言（ときには雑談）を頂いた。

そして山伏・修験道を自身の研究テーマに据えることにした私は、学部３年時から高埜利彦先生の近世史ゼミにも所属（兼ゼミ）させていただいた。高埜ゼミは家永ゼミと違い院生が多く（夏合宿などは学部生と院生合同で実施）、緊張感のある雰囲気であったが、それもまた新鮮で楽しいものであった。高埜先生の指導は、学生自身あるいは学生同士の議論で研究を深めることを重視しており、ゼミでは自由闊達な議論が展開していた。そうして議論の最後に、議論をまとめるようにアドバイスを与える、というのが高埜先生の指導スタイルであった。

この二人の恩師のもとで学んだことが、現在の教育・研究の礎となっているといっても過言ではない。個人的には高埜スタイルで学生の自主性を重んじるようにしたいと思いつつも、気が付くと私が長時間話してしまい、学生が聞き役になってしまっている。知らず知らずのうちに家永スタイルに毒されているな、と苦笑してしまうこともしばしばである。

さて、もう一つの出会い、本との出会いの話に移ろう。

私の転機となった本の一冊目は、和歌森太郎『山伏』（中公新書、1964年）である。大学１年から２年に上がるころの春、ゼミの選択で悩んでいた私がたまたま図書館で手に取ったのがこの本であった。当時は修験道研究の大家であった和歌森氏の名前も知らず、いわゆるジャケ貸りで手に取ったに過ぎなかった。そのころ、漠然と宗教的な何かをテーマにし

たいと考えてみたものの、王道的なテーマもやりたくないと思っていた私は、そのタイトルに惹かれたのである。

和歌森氏の修験道研究としては、『修験道史研究』（河出書房、1943年）の方が著名であるし、現在でも修験道研究の必読文献である。それに対してこの本は和歌森氏の晩年に書かれたもので、『修験道史研究』で培われた歴史学的考察に、民俗学的視角を組み込んだ叙述になっており、それが本書の魅力となっている。副題に「入峰・修行・呪法」とあるように、山岳修行の作法や思想、呪術的活動、中世における修験道の歴史的展開など、多様な観点から修験道の面白さが語られている。当時は内容を十分に理解できたわけではなかったが、山岳で過酷な修行をし、そこで得た験力でもって加持祈禱などの呪法を行う呪術的宗教者―山伏という存在に興味を抱くきっかけとなったのが、この本である。

二冊目は、黒田俊雄『寺社勢力』（岩波新書、1985年）である。大学２年になり、宗教、とくに仏教に関わる何かをテーマにしたいと考え始めた際に、中世寺院史をやるならば黒田俊雄氏の研究を読まなければならないと知った。そこで手に取ったのが本書である。この本を選んだ理由は、「新書で読みやすそうだから」という情けない理由以外にないのだが、結果としてそれが功を奏し、現在に至るまで黒田氏の寺社勢力論と向き合いながら研究をしているのだから、人生わからないものである。

この本では黒田氏の寺社勢力論が全面的に展開され、社会集団としての僧侶たちの活動、生活、歴史的展開が見事に描かれている。副題「もう一つの中世社会」の通り、武家中心に語られる中世史を僧侶を主役に叙述し、それに成功した稀有な書でもある。中世＝武士の時代、中世の仏教＝鎌倉新仏教、という私の固定観念は見事に覆され、がぜん中世の僧侶や寺院、仏教について興味が湧き、黒田氏の著作や関連する研究書を読み進めた。私が中世寺院史をテーマにすることを決めたのは、『寺社勢力』との出会いによるところが大きい。

改めて振り返ってみると、私が研究者の道を志すきっかけとなった出会いは、必然ではなく偶然の産物と言える。かつて芥川龍之介は「運命は偶然よりも必然である『運命は性格の中にある』という言葉は決して等閑に生まれたものではない。」（『侏儒の言葉』岩波文庫、1932年）と書いた。二人の恩師、二冊の本という、二つの出会いは運命か偶然か必然か―そんな大げさなことは私にはわからないが、「幸運」であったことは確かだろう。多くの学生にも、そうした「幸運」があらんことを願ってやまない。

実習の感想

実習Ⅳ・国内コース巡検報告

小池　富雄

教員の参加者は小池と田中和彦准教授の２名。学生の参加者は女子４名、男子15名の合計21名であった。巡検先は、沖縄本島と島々である。

主たる目的は、島ごとに違う風土と歴史を考古遺跡や史跡、博物館、美術館をめぐり体感して学ぶ６泊７日である。

琉球諸島は、考古学的に見ると東南アジア・大陸から日本本土への文明・交易の中継地として注目される。14～16世紀には東シナ海の海上交易を基盤にした独立王国として独自の文化を持ち、琉球王国として繁栄した。

江戸時代には島津氏の支配下に置かれ中国清朝と冊封体制のもと二重支配の中で明治維新を迎えた。第二次大戦後は、アメリカ軍の統治下におかれて、1971年（昭和46年）に日本に復帰した。年配の県民は、ドル紙幣を日常

に使い、自動車も右側通行であったのを体験している。今日も沖縄本島には、多くの米軍基地がある。

旅程の概略は下記である。

9／6　羽田→那覇空港経由新石垣空港。竹富島泊。
9／7　西表島マングローブ体験、由布島、石垣島泊。
9／8　八重山博物館、宮古島泊。
9／9　美ら海水族館、本部泊。
9／10　今帰仁城、山下洞穴、那覇泊。
9／11　座喜味城、浦添ようどれ・美術館、首里城、沖縄県博、せーふぁー御嶽、那覇泊。
9／12　那覇市歴史資料館、那覇空港→羽田空港

実習Ⅳ・国外コース
中国山西省の世界遺産巡検旅行

緒方　啓介

この巡検旅行の目的は、中国山西省の雲崗石窟・五台山・平遙古城などの世界遺産を巡り、その歴史や遺物を学ぶとともに、現代中国の文化財への取組み方を学ぶことにある。

参加学生は13名。引率教員は緒方と近藤先生で、緒方の旧友孫文選氏にスルーでお世話いただいた。改めてお礼申し上げたい。

初日から四川料理の激辛の洗礼を受けた。昔のB寝台を連想させる夜行列車で寝不足気味だった学生たちも、雲崗石窟のスケールに一気に目が覚めたようだった。翌朝は内陸性気候の２℃の寒さに震えながら五台山へ向かう。五台山では９世紀に円仁が逗留した竹林寺、中国最古の木造仏殿である南禅寺などを巡検した。山西省の省都太原では、明代の町がそのまま残される平遙古城などを見学した。最終日には天安門広場と紫禁城を訪れた。学生達には、経済発展目覚ましい中国に触れたことで、改めて日中関係の重要性を再認識してほしい。

9／6　羽田空港発、北京首都空港着。深夜北京から夜行寝台列車で山西省大同へ。
9／7　早朝大同着。休憩後、◆雲崗石窟－善化寺・華厳寺。大同泊。
9／8　応県仏宮寺釈迦塔(応県木塔)－◆五台山菩薩頂－◆顕通寺－◆殊像寺。五台山泊。
9／9　◆五台山竹林寺－◆仏光寺－◆南禅寺－太原泊。
9／10　交城県玄中寺－◆鎮国寺－◆平遙古城－◆双林寺。太原泊。
9／11　山西博物院見学後、太原武宿空港から北京へ。北京鮮魚口散策。北京泊。
9／12　天安門広場－◆紫禁城(故宮博物院)見学後、北京首都空港から羽田空港へ帰国。

◆は世界文化遺産

五台山竹林寺にて

文化財学会
春季大会・秋季シンポ関連報告

平成30年度春季大会
『史跡小田原城跡の整備と活用』

報告　3年　川崎　清傅

平成30年度春季講演会は6月2日（土）鶴見大学会館大ホールに於いて、「史跡小田原城跡の整備と活用」と題し、講師に小田原城天守閣館長諏訪間順氏をお迎えし開催された。

今回の講演会は、1.小田原北条氏と小田原の繋がり、2.小田原城の発掘結果、3.発掘された小田原城の史跡活用、の3つの項目に分けて述べられ、最新の小田原城跡の発掘調査結果を含めてご紹介いただいた。

小田原城とは小田原北条氏の本拠として築かれた城郭である。「総構」と呼ばれる周囲9㎞にわたる堀と土塁が城を囲んでおり、その規模は戦国最大である。小田原合戦で小田原北条氏が滅ぶと幕府の統治となり、江戸時代においても西を守る重要拠点として機能した。

次に小田原城の発掘結果として、1982年から史跡整備の伴う継続的調査、三の丸内外の大規模調査、御用米曲輪の調査、近世三の丸の調査について述べられた。

これらの発掘調査によって、戦国時代の小田原城・城下町の様子が明らかになりつつある。中世小田原城の特徴は、総構をはじめとする堀は関東ローム層を50～60度の傾斜で10mを超える深さで掘られており、堀底には土を掘り残して障壁を設ける「障子掘」であることである。関東ローム層を60度の勾配で掘られた堀の防衛力が極めて高く、簡単に登ることはできない堅固なものであったといえる。また、発掘では堀底の覆土がシルト層であり、湧水や雨水により滞水している事もわかっており、空堀ではなかったことも明らかになっている。そして、小田原城総構内は広大な範囲であり、その中に田畑もあるため篭城には適した造りであった。このように、小田原城は防御力の高い城であったため、小田原合戦に参加した多くの戦国武将が自国の城に障子掘や総構を採用した。

御用米曲輪の調査は1982年と2011年の2回行われている。この調査により発見された御用米曲輪は、小田原藩の米蔵ではなく、徳川将軍家の米蔵であった。このことから、江戸時代の小田原城下町の位置付けは重要なものであることが分かった。このような近世の米蔵が残されている絵図の通りに検出されたが、他にも戦国期の建物跡と庭園が検出され、全国で類例のない墓石を使った池、切石を敷き詰めた遺構が検出されている。検出された戦国期の建物と庭園は、北条氏の当主クラスが居住していた可能性が高い事を示唆している。また、この庭園は全国に類例が無く、北条氏の斬新性などが伺える造りとなっている。

史跡の復元整備に関しては、史跡の復元には①発掘による発見、②絵図・指図などの寸法がわかる図、③本当にそうだったかわかる古写真の3つが必要となる。小田原城馬出門の復元は、発掘による発見、絵図、古写真、の3つ全てが揃っていたため復元する事ができた。

史跡活用については、主に小田原城自体について述べられた。小田原城は昭和35年に鉄筋コンクリートの復元天守として建てられ、平成27年に耐震工事が行われている。この時に空調設備や展示のリニューアルも行い、リニューアル後は博物館形式で最新の研究を知ってもらう事を目的に展示・運用がさている。コンセプトとしては①歴史観光の拠点としての小田原を中心に歴史的魅力を発信する事、②観光客にわかりやすい展示をする、③多言語対応、④展示物の大幅減少の対応、⑤グラフィックの充実による展示、となっている。また、天守模型や引き図、文献調査から天守最上階に安置されていた天守7尊の具体的な間取りなどが明らかになり、摩利支天空間が天守閣に再現されている。

最後に今後の展望について、現在歴史的資源を生かした観光復興を行っており、今後も小田原市観光戦略ビジョン・歴史観光まちづくりの推進などを行っていくと述べられた。

平成30年度秋季シンポジウム
『漆研究の最前線』

報告　２年　菊池　優希

今回の秋季シンポジウムは、11月17日(土)『漆研究の最前線』と題し４人の講演者を迎えて開催された。

- 「総論　文化財学としての漆工芸研究」
  本学文化財学科教授　小池富雄先生
- 「漆工文化財の保存修復―日本の指定文化財と在外作品の修復―」
  本学非常勤講師　室瀬祐先生
- 「Ｘ線CTはじめ科学的な分析を応用した漆工文化財研究―本学での事例を中心に―」
  本学大学院研究生　渡邉裕香氏
- 「桜燕蒔絵源氏物語書物箪笥(本学新収品)の保存修復と化学分析」
  本学大学院博士後期課程　野口明日香氏

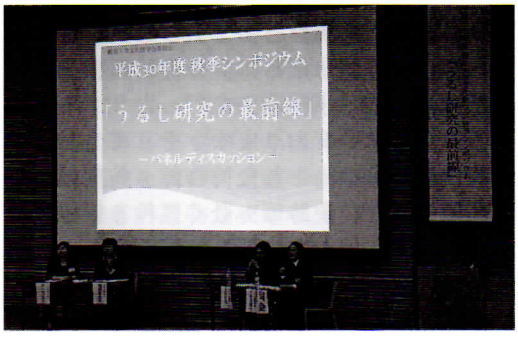
小池富雄氏は、漆研究の総論として漆の研究領域、研究成果、漆工研究についての流れを報告。まず、漆の研究は、①美術史、②造形美術、③文化財保存修復、④科学的物性研究、⑤産業、の５つの点がある。最近では、漆は酸、アルカリの両方に強いことから科学的物性研究が行われている。近年の成果として、①考古学、②科学分析、③国産漆の使用と増産、④海外の研究、発見、修復の４点を報告。次に、漆工研究についての流れを概観してみた点から、①漆工史学会、②漆芸修復研究会、③うるしを科学する会、④日本文化財漆協会、⑤日本漆アカデミーの５団体の動向を紹介した。他にアメリカのゲッティー保存修復研究所のプロジェクトなども紹介した。

室瀬祐氏は、漆工文化財の保存修復について報告。漆工文化財は文化庁の方針で、現状保存が基本となっている。文化財修理の決定について、国宝・重文などの指定文化財は「所有者」、「修理技術者」、「文化庁や自治体などの責任者」が協議を行う。指定文化財以外は、「所有者」、「修理技術者」が協議を行う。漆工文化財の修理について、劣化した漆工文化財の漆塗膜には、合成化学樹脂ではない漆を補うことが効果的である。日本はこのような漆を使った技術がたくさんある。しかし、漆は一度固まると戻らない不可逆の素材でもあるので、海外では敬遠されがちである。このような修理の現状から、日本の漆技術を世界に広めていかなければならないと報告。

渡邉裕香氏は、Ｘ線ＣＴ装置の分析結果について報告。ＣＴ装置の導入は、文化財の断層撮影が行える為、目視観察が困難な内部構造を立体的に捉えられるようになった。漆工品のＣＴ調査においては、目視観察が難しい生産国などの判定に重要な役割を果たしている。ＣＴ調査は、紙や布などの素地の構造、技法分析、劣化状況の把握に有効な手段である。しかし、漆工文化財のＣＴ調査は、彫刻などと比べて歴史が浅く、調査のデータが少ない為、類例が少ない現状にある。ＣＴ調査の活用は、博物館の装置導入に伴って増加傾向にあり、海外にも広がりつつあると報告。

野口明日香氏は桜燕蒔絵源氏物語書物箪笥の修復、保存について報告。同箪笥は、全体が黒漆で江戸時代の蒔絵である。漆塗膜の剝落、作品表面の汚れ、亀裂の進行が懸念されていた。その為、修復工程で燻蒸、木地の欠損部分の補填として麦漆含浸、漆固め、欠損部分の復元、によって形状復元が行われた。また、木地の亀裂の修復も行われた。漆塗膜のクリーニングにより、作品の蒔絵の様子がわかるようになったと報告。

以後、パネルディスカッションで活発な意見交換が行われた。



研究部会報告

うるし研究部会

うるし研究部会では平成30年度８月２日に名古屋見学、３日・４日に長野県木曽で学部生３名、院生１名、ＯＢ１名、本学教授の小池富雄の６名で漆の産地見学を行いました。２日の名古屋見学では午前と午後で２か所の場所を訪れました。午前の見学では、名古屋城が工事中であった為、2018年に復元された本丸御殿において、襖絵などを見学し、石棺式石室と呼ばれる島根県松江市山代町の団原古墳にあった石室などを訪れました。午後には小池教授の職場であった徳川美術館を訪れ、甲冑や能の舞台や実際に使われていた衣装などを見学しました。またバックヤードを見学させていただき、普段見ることのできない展示などに使われる道具を見ることができ貴重な体験をさせていただきました。

３日は長野県木曽を訪れ、木曽くらしの工芸館の方々に漆畑や漆の工房を案内していただきました。漆の木が適正な大きさに育つのにお金と時間がかかり、10年から15年ほどの時間を要することなどを聞き、国産の漆の貴重さを知ることができました。４日には、漆器を実際に制作している蔵の工房を見せていただき、沈黒という技法を実際に院生と学部生が体験しました。このように産地見学では漆について新たな事を多く学ぶことができ、研究部会にとって貴重な経験となりました。

江戸東京研究部会

私たち江戸東京研究部会は、「歩くと歴史が見えてくる」をモットーに月に一度の巡検を中心とした活動を行っております。主な活動内容は、毎週水曜日の昼休みに巡検先を決めたり、事前・事後調査を行ったりするミーティングを開いております。そして、月に一度程度東京を中心とした博物館・美術館、寺社仏閣ならびに史跡等へ赴く巡検を行っております。今年度からの新しい試みとして、紫雲祭での展示も行いました。

平成30年度の主な巡検先は、江戸東京博物館・刀剣博物館・國學院大學博物館・明治神宮・浅草です。前期は博物館を中心とした巡検を行い、部会員の知識の向上を図りました。後期には事前準備に力を入れ、部会員が相互に確認しあいました。

紫雲祭での展示は、「神輿」とし、プラモデル展示と概説レポートの無料頒布を行いました。特に反響がよかったのが「吹き返し」という部品についての「賽銭が投げ込まれた際に落ちないようについた。」という説明でした。今後も紫雲祭では展示をしていきたいと考えております。来年度の紫雲祭展示にもご期待ください。

今後はより深い所まで調査・研究ができるよう、部会員の知識の向上を目指した発展的な活動をしていきます。

古典芸能研究部会

我々古典芸能研究部会は『昔から親しまれてきた遊戯を体験し、その楽しさと文化を考えてみよう』という目的のもと、2018年10月27日土曜日、百人一首の体験を踏まえ、小倉百人一首の歴史とその成り立ちなどを調査・考察を行いました。

『百人一首』とは、その名の通り、百人の名だたる歌人の歌から一人の歌人につき一首ずつ選び、合計百首集めたものです。それらは『百人一首』を編纂するにあたり新たに詠まれたわけではなく、天皇や上皇の命令によって編纂された『勅撰和歌集』から選ばれた歌が主です。平安末期から鎌倉中期の歌人、藤原定家が編纂したとされています。また小倉とは収集者の藤原定家が別荘である小倉山荘で編纂したことが由来とされています。

編纂にあたって藤原定家が定めた基準は分かりませんが、ざっと百首読んでみると、『川』『花』『山』『風』『草』『紅 葉』『光』『波』『色』など、百人一首に選ばれた歌には自然と寄り添うその時代の人が垣間見えるものが多いです。自然は人間の住まいにもっとも近い安らぎです。つまり藤原定家が編纂した際、『定家の息子為家の妻の父から、別荘のふすまに和歌の色紙を張りたい』という依頼内容と『京都奥嵯峨にあった小倉山荘とい

う定家の別荘で歌を選んだ』という編纂状況、つまり『安らぎを求める場』に飾るものを『安らぎがある場』でゆっくり選ぶという状況が、定家の心理に影響したのではないかと考えました。

その他の活動としましては12月２日に歌舞伎座で行われる「十二月大歌舞伎」、また来年の2019年２月２日には国立能楽堂で行われる「第28回能楽若手研究会東京公演　東京若手能」などの巡検を予定しております。

宗教研究部会

本年度の宗教研究部会は、個人の研究を第一に活動してまいりました。部会全体としての活動は、７月21日と11月25日に行った國學院大學博物館への巡検です。國學院大學は、皇室と深い関わりがあり、神道文化を学ぶ学科があることで有名ですが、大学博物館にも皇室ゆかりの所蔵品や神道に関する展示が多くありました。その中で、特に興味深かったのが神饌（しんせん）の模型展示です。神道では様々な食事が神に捧げられていることがわかりました。また、11月の巡検の際には、企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」が開催されており、巡検参加者は神道の儀式への興味関心・知識が、より深まったと思います。

来年度はこうした巡検をより活発に行い、神道以外の宗教についても関心・知識を深めていき、個人の研究の成果を発表する機会を設けたいと考えています。

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会（以下美工研）は、絵画や彫刻など美術品や工芸品を展示している博物館・美術館の巡検を行い、学びながらより深い知識を深めることを主な目的として活動しています。緒方ゼミに入った３年生５人と４年生８人、今年新たに入会した１年生２人、２年生１人の総勢16人で美工研の活動を行っています。

今年度は大学が春休み期間中である３月６日～８日の３日間で、顧問の緒方啓介先生と４年生８人で京都・奈良巡検を行いました。

１日目は平等院鳳凰堂へ向かい、鳳凰堂内部の荘厳さや藤原摂関時代を彷彿とさせる絢爛さに驚かされました。

２日目は奈良方面に向かい、興福寺・東大寺の他、新薬師寺や奈良国立博物館へ赴き、興福寺を中心として活動していた奈良仏師の仏像を数多く拝観しました。

３日目には総本山智積院・京都国立博物館・三十三間堂へ赴きました。総本山智積院では長谷川等伯一門による「桜図」や「楓図」をはじめとした16世紀の代表作ともいわれている国宝障壁画を拝見しました。写真にある障壁画は模倣ですが、当時はこの大書院に実物が飾られており、人々の目と心を楽しませていたといいます。また、庭園は「利休好みの庭」と伝えられています。

歴史考古学研究部会

こんにちは歴史考古学研究部会です。今年は巡検などを行いませんでしたが室内作業を活発におこないました。先輩方が今まで集めた陶器の遺物の整理を行い目録を作ることを目標に毎週活動を行ってきました。まずは2、3年分の陶器の細かい分類、かわらけ、常滑、青磁、染付等他にもありますが、特徴的なものをピックアップし目録に掲載するものをきめました。目録に掲載するために遺物一つ一つに注記を行い、常滑には拓本をおこない各遺物の断面図を作成しました。今年中には製本詐欺は終わりませんでしたが来年の春までには目録を完成させたいと思い部員共々作業を進めています。

今年の研究報告会では部長の小田原が参加させていただいている発掘現場の遺物を踏まえての発表を行いました。かなり貴重な遺物であり改めて現場での経験は素晴らしい物だと再確認出来ることでした。また去年に引き続き多くの部員が発掘事業に参加をし各々が考古学について実地で経験を積んでいます。予定ではありますが来年は今年あまり行けなかった巡検を行い、遺跡や博物館をめぐり文献資料や考古遺物を実際に見て知識を深めていこうと思っています。

文化財学会平成29年度決算

収入の部（29年度）		支出の部（29年度）	
会費	409,000	講演会費	29,868
研究助成金(大学)	150,000	事務消耗･雑費･通信費	60,726
研究助成金(同窓会)	200,000	会誌印刷費	545,400
会誌印刷補助費	125,560	会報印刷費	55,620
雑収入(会誌収入含)	1,014	部会補助費	33,669
前年度繰越金	0	懇親会補助費	31,000
		次年度繰越金	129,791
合計	886,074	合計	886,074

平成29年度会誌積立金決算

収入の部（29年度）		支出の部（29年度）	
前年度までの積立金	1,051,484	次年度繰越金	125,560
		次年度繰越金	925,924
合計	1,051,484	合計	1,051,484

資産目録総額

銀行預金(会誌積立金を含む)	1,055,715

文化財学会平成30年度予算

収入の部（30年度）		支出の部（30年度）	
会費	350,000	講演会費	60,000
研究助成金(大学)	150,000	事務消耗･雑費･通信費	30,000
研究助成金(同窓会)	200,000	会誌印刷費	500,000
前年度繰越金	12,791	会報印刷費	70,000
		部会補助費	40,000
		予備費	129,791
合計	829,791	合計	829,791

平成30年度会誌積立金予算

収入の部（30年度）		支出の部（30年度）	
前年度までの積立金	925,924	次年度繰越金	925,924
合計	925,924	合計	925,924

平成30年６月２日の総会において承認された決算並びに予算です。

平成30年度の年間行事予定

●春季講演会
日　時：６月１日（土）午後３時から
会　場：鶴見大学会館地下１階メインホール
テーマ：「文化財保護法の改正と文化財の地域活用（仮）」
講　師：谷口　肇氏
（神奈川県教育委員会文化遺産課）

●秋季シンポジウム
日　時：11月2日（土）　午後1時から
会　場：鶴見大学会館地下1階メインホール
テーマ：「中世東国の政治と宗教（仮）」
講　師：近藤祐介先生（本学文化財学科講師）他

鶴見大学文化財学会会則

1．本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2．本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3．本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4．本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5．本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
　1　研究等の発表
　2　講演会の開催
　3　開始・会報等の編集作業
　4　研究部会活動
　5　HP上での広報活動
　6　親睦その他の事業
6．本会に次の役員を置く
　1　会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
　2　委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7．本会の経費は会費（年額千五百円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8．本会の事務所は下記におく。
　〒230-8501
　神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地5号
　鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

付　平成11年10月16日から発足する。
付2　平成16年4月1日　一部改正
付3　平成23年4月1日　一部改正
付4　平成28年4月1日　一部改正

編集後記

無事、文化財学会報20号を刊行することができました。快く執筆を受け入れて下さった方々、又、ご助力頂きました多くの方々に篤く御礼申し上げます。この会報を通してより多くの方に本学会を知っていただければ幸いです。今後もよりよい学会になるよう、委員一同尽力してまいります。

（会報一同）

連絡先
〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学　文化財学会
URL：http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html
E-mail：bunkazai@tsurumi-u.ac.jp